

## 里山におけるカメラトラップ

群馬県環境森林部自然環境課 中山 寛之、坂庭 浩之、米谷 由美子

### 1 はじめに

群馬県内には豊かな自然があって、様々な動物が森に住んでいる。だが、これらの動物の活動についてあまり知られていない。カメラトラップは、動物たちの自然に近い姿を記録する手段の一つであり、その地域の生息動物の状況を観察するのに適している。動画と静止画の二つの記録方法があり、今回は動画撮影で調査を実施したので、その取り組みについて紹介する。



### 2 調査方法

調査地は、安中市上後閑地内の山林で、有害鳥獣捕獲に従事されている地元猟友会の御協力を頂き、イノシシ捕獲のために架設している箱わなの周辺を選定した。箱わな周囲の立木に防水用ケースに入れたビデオカメラを取り付け、箱わなに近づいた動物に反応するように赤外線センサーを設置した。使用した機材は、赤外線センサーが「トレイルマスターTM700V」、ビデオカメラは「ソニーハンディカムDCR-TRV70」である。

設置箇所については、田畑、集落が終わって森林が始まり、直近の人家から5～600m程離れたスギ人工林である。隣接地には桑畑もあり里山と言える地形である。

調査期間は平成21年5月19日から平成21年11月15日であるが、実際に記録が開始されたのは6月8日からで、動物の記録が終了したのは10月11日であった。2週間程度の間隔でテープ交換及びバッテリー交換を行ったが、センサーが頻繁に反応して撮影回数が増えた場合には、5日間程度でテープが終わってしまうこともあり、テープ終了と交換日の間に空白期間ができてしまうことが多々あった。



【防水ケースに入ったビデオカメラ】



【箱わなに焦点をあてた赤外線センサー】

### 3 調査結果

調査地周辺ではイノシシによる農作物被害が増加しており、捕獲するために架設されている箱わなであり、誘引物として米ヌカがまかれていた。湿気や腐朽もあるので、捕獲隊員が誘引物を補給しているのが記録されていた。記録されている動物たちはこの誘引物にひかれて箱わなに近づき、米ヌカをついばむ状況が記録されていた。なお、箱わなの仕掛けはされており、条件が揃えば動物を捕獲できる状態にあったが、わなが作動して動物が捕獲される状況は記録されていなかった。



【イノシシ捕獲用の箱わな】

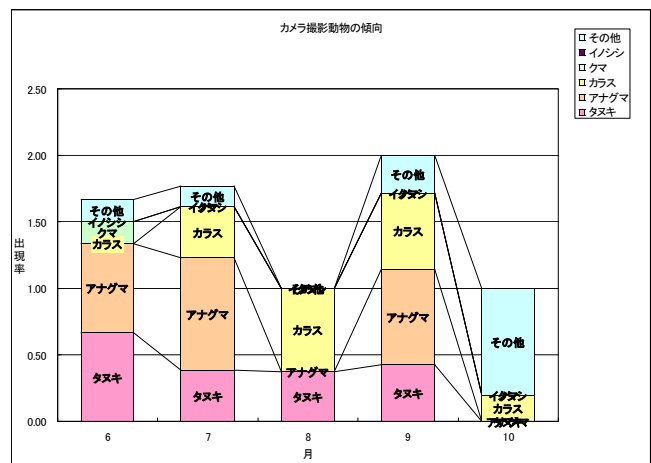
【ツキノワグマ】



【アナグマ】



【タヌキ】



【出現率＝特定の動物が記録された日数／動物が記録できた日数※】  
※夜間撮影などで、動物が確認できなかった日・時間を除く。

記録・確認できた動物は、タヌキ・アナグマ・カラス・ツキノワグマ・ネコ・キジであった。イノシシは記録されていない。ツキノワグマについては、6月8日に約14分間記録され米ヌカを食べていた。記録回数はアナグマ（群馬県RDBの注目種）が最多で、次いでタヌキ、カラスの順であった。アナグマについては、定着性が高いため同一個体が繰り返し撮影されていた可能性が否定できない。時には家族と推測される4匹の個体が同時に記録されていた。また、アナグマとタヌキとが遭遇し餌を取り合って争う場面も記録された。ネコやキジも米ヌカを食べている状況が記録されている。

#### 4 考察

この地域ではイノシシによる農作物被害が発生しており、その対策として捕獲用の箱わなが架設された。この箱わなは、ツキノワグマが間違っって入ったとしても、天井部分に直径30cm程の穴があって脱出できるような細工がされていて、ツキノワグマの錯誤捕獲防止手段が講じられている。

今回記録されたツキノワグマは、箱わなの中に入ることなく周囲に散らばる誘引物を食べていて、記録されたのは一日の約14分間のみであり、それ以上に記録されていないことから、この地域の定着個体ではなく、長野県境一帯を移動している個体を通りすがりに記録されたと推測できる。

捕獲目的であるイノシシについては1度も記録されない状況であったが、この調査結果のみで評価すると、調査地における動物叢は、イノシシの存在が非常に薄いと言える。米ヌカによる誘引があるにも係わらず記録されなかったことから、調査地周辺を行動圏としている個体は非常に少なく推測される。

ビデオカメラによるカメラモニタリングは動画による記録のため、動物の行動特性が確認できる。一方、テープ交換頻度や夜間撮影時の光量確保などの課題が残る。

#### 謝辞

本調査実施につきまして、各関係者の皆様から多大なる御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。